

令和2年度 道川分教室研究計画

- 1 研究主題 「児童生徒による学習評価の充実—自立活動の授業づくりを通して—」
(1年次/2年計画)

2 主題設定理由

(1) 社会的背景

今年度から小学校、特別支援学校小学部で全面实施される学習指導要領では、「生きる力 学びの、その先へ」と示され、学校で学んだことが、明日、そして将来につながるように、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理されている。その際、特別支援学校では学びの連続性を重視している。

平成28年12月の中央教育審議会答申では、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラムマネジメント」が求められた。その中には改善すべき課題として、児童生徒に「何が身に付いたか」（学習評価の充実）を指摘している。特別支援学校学習指導要領解説総則等編では、「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものである」と示し、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるためにも重要であると、指導と評価の一体化の必要性が明確にされた。

(2) 児童生徒の実態

今年度の道川分教室には、小学部1名、高等部5名の計6名が在籍している。独立行政法人国立病院機構あきた病院に入院している児童生徒を対象に訪問教育を行っている。

児童生徒は、脳性まひ等に起因する重度の肢体不自由と知的障害を有しており、日常生活全般において医療的ケアや生活支援を必要としているが、いろいろな思いをもち、周囲からの働き掛けに心を動かしている。しかしながら、その表出は微細で受け取る側の教師も読み取りに難しさを感じることが多い。

(3) 昨年度の研究から

昨年度は「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり」というテーマのもと、自立活動における個別学習に焦点を当てて研究に取り組んだ。

成果としては、授業づくり検討会を核としたチームで連携し、自立活動の流れ図を活用した指導計画・授業づくりを行い、複数の目による客観的評価と授業改善を行ってきたことで、児童生徒の関心の幅が広がり、活動への見通しをもち、意欲が高まる様子が見られた。表出のタイミングが早くなったり、快の表情が増えたり、気持ちを表出しようとする場面が増えたりという変容につながった。

一方で課題としては、1対1の個別学習が多く授業者一人での撮影が難しいため、映像記録の蓄積をしたり、各チームの授業づくりをチーム以外の教師と連携・情報共有したりすることが難しかった。そこで、今年度はこの点について改善を図りたいと考えた。

(4) 目指す児童生徒の姿と主題設定の理由

自分なりに周囲の状況が分かり働き掛けを受け止め、表情や発声、身体の動き等で達成感を表す姿を目指したいと考えた。児童生徒に何が身に付いたかを明確にしながら、児童生徒自身と教師とで次の学びや生活に生かすことのできる目標設定と振り返りの機会、学習評価の在り方を検討し、充実に向けた実践を積み重ねる必要があると考える。教育課程に大きく位置付けられている自立活動の中で、これまでの研究の取組、社会的背景を踏まえ、本研究主題「児童生徒による学習評価の充実－自立活動の授業づくりを通して－」を設定した。

3 研究仮説

自立活動の個別学習又は小集団学習において、チームで検討し多角的な視点で実態把握をすることで児童生徒の目標の妥当性が高まり、授業改善を積み重ねることで児童生徒の学びの実感や達成感を高めることができるのではないかと。

4 研究対象授業

- ・南北チーム：グループ学習（小5、高1）
 - ・高3チーム：個別学習
- } 各1名を抽出

5 研究方法

2年計画の1年次である今年度は、昨年度取り組んだ教育的ニーズや自立活動の流れ図を年度当初から活用し、アセスメントチェックリストや映像及びエピソード記録を用いて実態把握を行い、チームで多角的な視点をもちながら授業実践、評価・改善を図っていく。学習評価においては、目指す個々の児童生徒の「学びを実感し達成感を表す姿」について確認し、学習評価記録用紙を作成する。授業改善に当たっては、活用しながらその姿に迫るための場面設定をしたり、児童生徒の思いを読み取りフィードバックしたりすることを大事にして取り組む。

「道川分教室における学習評価」とは、

児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことは難しい実態であるが、児童生徒が学びを実感し、達成感を表す姿を児童生徒自身の評価と捉えることとする。

そして2年次には、授業実践、評価・改善を継続して行い、学びを生かす場面を広げ、評価・検証を行っていきたいと考えている。

(1) 授業づくり

- ・アセスメントチェックリストや自立活動の流れ図を活用した実態把握をチームで検討して行う。
- ・児童生徒が主体的に活動するための分かりやすい状況づくりである4つの観点「言葉掛け」「姿勢づくり」「教材・教具の工夫」「授業展開」を視点にもちながら、授業づくりを進める。
- ・チームごとに授業づくり検討会（※）を行い、映像及びエピソード記録の活用等により指導目標、指導内容、題材構成の検討、評価を行う。
- ・校内授業研究会では、授業づくり検討会で積み上げた授業改善や変容及び学習評価（目指す個々の児童生徒の「学びを実感し達成感を表す姿」）の具体について協議し、外部専門家やチーム以外の教師等による評価を得て、より専門的、多角的に指導内容を検討して、さらに授業改善を進める。
- ・学習評価記録用紙を作成し、映像及びエピソード記録と併用しながら授業に生かすことができるように様式を検討・改善を図る。

(※) 授業づくり検討会 (年9回)

- ①児童生徒の実態について、アセスメントチェックリストを活用しながら確認する。
- ②児童生徒一人一人の実態、卒業後の目指す姿、教育的ニーズ、目標等について確認し、昨年度作成した自立活動の流れ図を見直す。それを基に個別学習の指導内容について検討する。
- ③対象児童生徒の授業について年間指導計画、題材内容を検討し、個別の指導計画に反映させる。
- ④対象児童生徒の授業をビデオで参観し、評価と改善点について話し合い、指導主事計画訪問に向けて指導案(略案)を作成する。
- ⑤指導主事計画訪問での指導助言を受け成果と課題の確認をする。また、中間評価(個人、題材内容)を行い、これまでの指導が適切であったかを確認し、2学期以降の指導に生かす。
- ⑥対象児童生徒の「学びを実感し達成感を表す姿」を確認し、学習評価記録用紙を作成する。また、学習評価に関連したエピソード記録を基に手立ての有効性について分析する。
- ⑦授業研究会の指導案(正案)作成のために、対象児童生徒の授業をビデオ参観し、評価と改善点について話し合う。
- ⑧授業研究会を受けて成果と課題の確認をし、以後の指導に生かす。
- ⑨児童生徒一人一人の今年度の変容や成果と課題について評価・確認し、次年度に向けての方向性について検討する。次年度に向けた自立活動の流れ図の見直しを行う。

(2) クォーター研修及び教材・教具研修

- ・校内外の人材を活用した自立活動や教材・教具についての15分程度の研修を年間を通して計画的に実施し、専門性の向上や日々の授業改善に生かす。